

平成 28 年度重点指導事項

日本高等学校野球連盟
審判規則委員会

「礼に始まり礼に終わる」

我が国の学生野球のスタイルになっている、試合の始めと終わりに、両チームがホームベースを挟んでおこなう挨拶「礼」は“礼に始まり礼に終わる”という試合に携わる全ての人に感謝と敬意を払うスポーツマンシップの精神から生まれたものです。

1915年の第一回全国中等学校優勝野球大会において、当時の平岡 副審判長が訓話の中で「徳義を重んじる勇者の試合には、必ず付随すべき礼儀として制定した」と記録に残っています。

ところで昨今、同時に挨拶、同時に礼という礼儀の本質が乱れてきているのではないのでしょうか？

- ・相手チームが頭を下げた後、ワンテンポ遅れて礼をする。

- ・礼の動作と発声のタイミングがバラバラで全員が揃わない。

また・チーム同士の礼の後、審判委員の方を向いて再度礼をする。

- ・打者がバッターボックスに入る時、投手がボールを受け取る時、伝令が白線を越えるとき等

何度も何でも礼をする、必要なことでしょうか？

既に試合開始時に挨拶は済ませています。

甲子園大会では、大会審判委員は試合の始めと終わりには全員立礼しています。また何時の頃からか自然発生的に役員やネット裏におられる各都道府県の野球関係者も、一緒になって立礼されるようになっていきます。

球審は、試合開始時には「始めます、礼」終了時には「終わります、礼」と掛け声をかけています。審判の「礼」の掛け声で「お願いします」「ありがとうございました」と挨拶しますが、この「お願いします」「ありがとうございました」は相手チーム、審判委員だけに言っているのではなく、その試合に関係する全ての人々に敬意と感謝の気持ちを表しているのです。

昨年 100 年を迎えた選手権大会、2018 年には選抜大会は 90 回、選手権大会は 100 回を迎えます。選手・指導者・関係者の皆さん、今一度学生野球の原点のスタイルに立ち戻り、試合の挨拶は始めと終わりの二回で、同時に揃って礼をする「一同、礼」で、100 年前から受け継いだ学生野球精神を維持していきましょう。